

2026年7月発行

茨木御堂 第308号



真宗大谷派



茨木別院

(輪番 河原 恵)

〒567-0817 茨木市別院町3-31

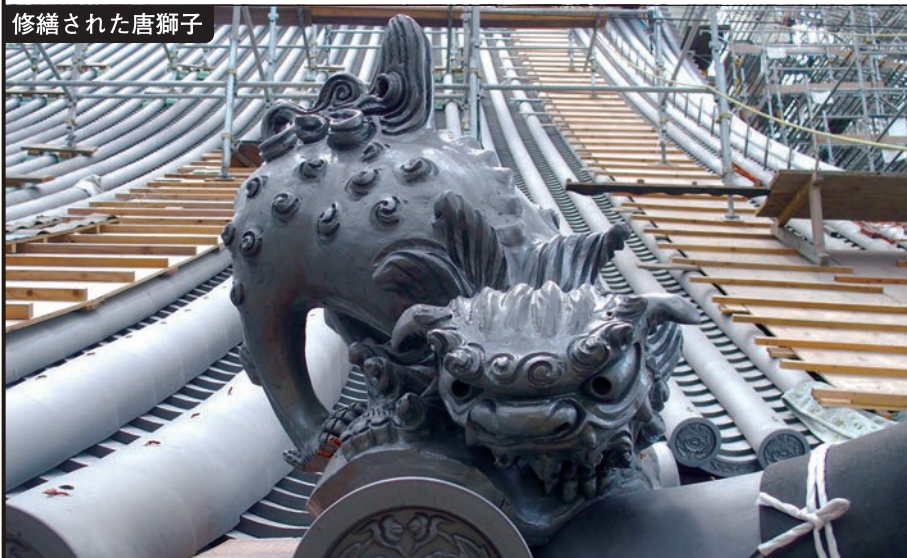
TEL (072) 622-2903

FAX (072) 625-9445

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに願いがかけられている

修繕された唐獅子



万物一体の

真理に基づく

平等無碍の

正念より起こる

(『清沢満之集』 岩波文庫 八二頁)

昨年の一月から始まった本堂の改修工事も終盤にさしかかってきました。屋根の小屋組の工事を終え、本葺き瓦による葺替えもほぼ終わり、瓦工事も鬼瓦の据え付けと大棟等の罫斗(のし)積みを残すのみとなりました。

八月のお盆過ぎには、本堂の足場の解体が始まります。これまでも何度か足場を使って軒先から工事の様子を見ていただきましたが、七月十六日の暁天講座のあと、八時半過ぎから最後の見学会をすることになりました。

安永六年(一七七七)に再建されてから二五〇年経つ茨木別院の本堂が蘇り、新しい姿が見られるのも間近となりました。これもみな、崇敬寺院と別院のご門徒の皆様や市民の皆様方からご懇志をいただいたことによるものと心より感謝しております。

このような工事ができたのは、理知を超えた絶対無限の妙用によるものと改めて感じるところです。それはまた、清沢満之が、「如来は私に対する無限の慈悲と無限の智慧と無限の能力である」(『清沢満之集』一八頁)と言うことでもあると思います。さらに清澤は、その心を、「斯くして私の信念は、無限の慈悲と無限の智慧と無限の能力との実在を信ずるのである」と表出されるのです。

この無限の慈悲と無限の智慧と無限の能力を具体的にいえば、この本堂を二五〇年前に建立し、仏法興隆を願われた人々の心であり、大工さんや瓦屋さんなど職人の方々の智慧と技術であり、この本堂を令和の時代まで引き継いでこられた人たちの意志と努力であると考えます。

そこには、「万物一体の真理」といういのちの成立ちがあり、「平等無碍の正念」によってその事実が相続せられた伝燈があると感じるのです。

南無阿弥陀仏 輪番 河原恵

茨木別院関連ホームページ

茨木別院 ➔ ibarakibetsuin.or.jp

いばらき大谷学園 ➔ ibarakibetsuin.or.jp/kids/

茨木別院

検索

茨木別院 月行事ご案内

●教如上人ご命日・五日講

- ・日時 五日(日) 午後一時半より
- ・講師 加藤 恵師

●本山九日講

- ・日時 九日(木) 午後二時より
- ・会所 教圓寺

七月 ●暁天講座

- ・日時 十六日(木) 午前七時より 勤行引き続きご法話
- ・講師 山口 知丈師
- ・パンと牛乳を株式会社 京仏具小堀様の協賛で用意しております。

●親鸞聖人ご命日・二十八日講

- ・日時 二十八日(火) 午後一時半より
- ・講師 茨木別院輪番

●教如上人ご命日・五日講

- ・日時 五日(水) 午後一時半より
- ・講師 加藤 恵師

●お盆墓法要

- ・日時 七日(金) 午前十時より
- ・本山九日講

八月 ●孟蘭盆会・夏の御文

- ・日時 十三日(木) 十四日(金) 午後一時半より
- ・講師 茨木別院輪番

●親鸞聖人ご命日・二十八日講

- ・日時 二十八日(金) 午後一時半より
- ・講師 茨木別院輪番

永代経法要

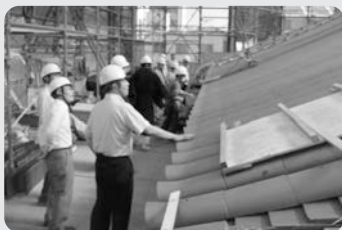
●令和八年度 茨木別院門徒会総会

五月二十五日、茨木別院会館において永代経法要が勤まりました。法話の講師には、昨年引き続き志紀正機師をお迎えし、ご法話をいただきました。

法要終了後には、現在進められている「茨木別院令和の大改修」の現場見学会が開催され、参加者の皆さまには工事中の足場が上がっていただき、改修の様子をご覧いただきました。

また、永代経法要に先立ち、例年どおり茨木別院門徒会総会を開催し、本年度の事業計画および予算案についてご審議いただきました。

今回の総会では、門徒会役員より年会費の改定案が提案され、承認されました。現在、年会費は「一口一、五〇〇円、二口以上」となっておりますが、次年度(二〇二七年度)より「一口二、五〇〇円、二口以上」に改定されます。詳細につきましては、今後改めてお知らせいたします。





園の子どもたちへ

いばらき大谷学園



朝の顔

園生活にも慣れ、子どもたちは保護者と離れる時も泣かずに笑顔で登園するようになってきました。しかし、家での出来事、朝登園する途中での出来事などで、いつもと少し表情が違って登園することが多々あります。その様子に気付きながらもいつもと変わらず挨拶をして迎え入れます。その後、心配して保育室の様子を見に行くと、朝の曇った表情は嘘のようで、友だちと朝の支度をおしゃべりしながら楽しそうにしている姿が見られます。

保護者の皆様は朝の顔を見て泣いている姿や、不安そうな顔を見るとその後が心配だと思えますが、そんな心配をよそに子どもたちは、友だちや保育者と遊んだり、忙しく過ごしています。

自分が元気でないときは友だちからパワーをもらい、友だちが元気でないときは自分が、いつの間にかパワーをあげています。知らないうちに助けあっているのです。

友だちの力は本当に偉大だと思います。朝の顔が色々理由があり笑顔がなくても安心して登園させてください。たくさん友だちや私たちが元気いっぱい待っています。

保育教諭 水野 むつみ

異年齢の関わり

保育教諭 南部 早苗

新年度が始まり、あつという間に一学期が終わろうとする中、子どもたちも新しい環境に慣れ、安心して園生活を送る姿が見られるようになりました。

朝、全園児で元気に一日を過ごせるように体操をして体を動かしています。そしてサーキットや簡単な運動をしてさらに体を温めて、各保育に移るようにしています。

体操が終わり、サーキットのルールを説明し、活動へと促します。まずは年長児がお手本となり活動を進めていきます。その後、年中児年少児、時には乳児へと続きます。年長児のお手本をしっかり見て、年中、年少児がこなしていく、子どもたちの柔軟な対応に、異年齢の関わり大切さを感じます。

異年齢保育のねらいは、人と関わる力を育てる、主体性と学び合いを育てる、生活の連続性を大切にすることです。年上児が年下児を気づかい、思いやりや責任感を育てる、また年下児が年上児に憧れ、関わりうとする気持ちを持つこと等が異年齢との関わりで期待できます。

朝のほんの少しの時間ですが、異年齢で活動することで異年齢の子どもが共に生活、遊ぶ中で、思いやりや憧れの気持ちを育みながら、互いに影響を受け合って成長していったほしいと思います。

また、色々な活動を通して異年齢児で交流していきたいと思います。



二〇二五年十一月十五日 結願逮夜法話

「仏教における信仰の問題」(三)

講師：宮下 晴輝師（大谷大学名誉教授）

沙門ゴータマの求道

沙門たちの求道の課題について話してきました。釈尊もまた一人の沙門となって出家されたのです。沙門たちが問題としたことは、苦しみや流転のなかにあるということでした。そこから解放されるための道を求めたのです。彼らは、出家して乞食こつじき遊行ゆぎやうするという独特のスタイルをとって道を求めました。出家は家庭生活を捨てることです。家庭生活とは夫婦で子どもを育てることです。そのための糧かてを得て家族を養う生活が家庭生活です。その家庭生活を捨てるということは、生業なりわいをも捨てることです。自分自身を養うこともままならなくなります。一切を捨てて自分の身体を養うためだけの乞食をしました。それは社会に養ってもらおうということでもありません。そして家庭生活を捨てることは、もはや定きまった生活場所をもたないことです。それを遊行といえます。沙門たちは、このように出家して乞食し遊行の生活に入るといって求道

のスタイルをとったのです。

お釈迦さまもまた、そういう沙門と呼ばれた人たちと同じスタイルをとって、道を求めるものになったのです。沙門ゴータマと呼ばれています。

この出家というのは、自分の生活が嫌いやになってそこから逃げだす家出いえでではありません。自分の生活をあげてすべて道を求めることに捧たもげたということができます。また出家したからといって、自分の家族との縁えんを切ったのではありません。釈尊は、家庭生活を捨てて出家して道を求め、その道が成就して仏陀になれます。それから、出家というスタイルのまま、自らが見いだした道の人々に説くという生活が始まっています。そして故郷の釈迦族しゃかぞくの町に帰られたときには、父シユッドーダナのために親しく法を説かれています。自分のかつての友人たちにも法を説くと、彼らは出家しました。出家とは独特のスタイルですが、それは求道のスタイルであって、縁を切るために出家したわけではありません。

親鸞聖人も最初は比叡山へ出家されますが、山を下りてからは、後の善鸞ぜんらんとよばれる長男をもうけたと考えら

れます。親鸞聖人が越後に流されるときは還俗げんぞくさせられ、やがてその地で恵信尼えしんにと家庭を持つことになったのでしよう。ただし、親鸞聖人の場合は、俗人となっていました。僧たのではなく、自らを「非僧非俗ひそうひぞく」と呼んでいます。僧にあらずということ、もはや出家の生活ではない。しかし出家の生活をやめて普通の生活にもどったのかという、そうではありません。道を求めることをやめたのではなく、それは非俗と言っているのです。それで「非僧非俗」と名のついているのです。

法然上人は、出家のままですが、お弟子さんには、「現世をすべき様ようは、念仏の申されん様にすぐべし…ひじりて申されずば、め(妻)をもうけて申すべし。妻めをもうけて申されずば、ひじりにて申すべし」(和語灯録わごとうろうく)という言葉を残されています。念仏のしやすいように生活をすればいいということです。出家したまま法然上人の教えを聞いている人もいたし、親鸞聖人のように家庭を持って教えを聞いている人もいました。そこにあるのは念仏の道を生活の中心にするということです。それが出家であれ在家であれ、真ん中にあるのは道を求め

るということです。

釈尊の出家の課題

沙門たちが苦しみや流転を課題として道を求めているように、釈尊もそうでした。では、釈尊にとっての苦しみとは、どういう課題だったのでしょうか。仏陀の生涯の物語である仏伝ぶつでんには、「四門出遊しもんしゅつゆう」というエピソードが伝えられています。

今日「仏伝」と呼ばれている仏陀の生涯の物語は、釈尊が入滅されてから二〇〇年ぐらい経たったところからまとめられていったと考えられています。最初から伝えられたエピソードがあったでしょうし、そのなかには歴史的事実も含まれていたでしょう。その中で、釈尊が出家されたのはどういう理由からであったのかを物語るのが「四門出遊」という物語です。

四門というのは四つの城門のことです。古代インドのお城しろというのは、城壁じょうへきで町が囲われ外敵の侵入を防いでいる城塞都市じょうさいとしのことです。町の人々はその中で生活をして、その外には田畑や森があったでしょう。釈迦族の町

は、インドの北の方、ネパールとの国境辺りにあったと言われています。

釈尊は、二十九歳の青年時代に出家をします。その出家のエピソードを伝える「四門出遊」の物語は、歴史的な事実を語ろうとするのではなく、出家の理由を語り出そうとするものです。城から出て森に散策にいきます。東門から出たときその途上に老人に出会いました。次に南門から出た時に病人に出会いました。そして西門から出た時には死者に、すなわち葬式に出会うわけです。最後に北門で出家者に出会いましたと、こういう物語になります。

要を言えば、老人に出会い、病人に出会い、死者に出会うということです。老病死という問題に出会うわけです。さらに、老病死という問題を抱えながらも、出家というスタイルで求道している人たちがいると知って、釈尊も出家されたのだという物語なのです。

求道の根本動機 — 老病死の苦

老病死の苦しみを見たということが釈尊の求道の根本動機になることをこの物語は語ろうとしているわけです。

苦しみにも様々な苦しみがあります。沙門たちのそれぞれの求道の課題も伝えられています。「六師外道」といわれる沙門たちの道の課題です。これは、釈尊の教説の中で語り伝えられています。六師というのは六人の沙門ということ、たくさんの弟子がいたので「師」なのです。苦しみについてどのように考えていたのか、六通りの考え方が紹介されています。仏教以外の道を知ること、は、仏教を学ぼうえでも大事なことです。「外道」というのは、仏教者ではない沙門たちのことをいっています。

沙門たちは、苦しみを流転と受けとめていました。たどりつくべき行先もなく、いつ始まっていつ終わるもしれず漂い続け、空しく老病死の苦しみを受け続け漂流し続けていることを流転といっている。漢訳者は流転生死、生死を流転することと受けとめました。現在の私たちの受けとめとしては、流転の生と受けとめています。そのような流転の生からの解放、流転生死の中から解放されること、すなわち苦からの解放を解脱といっています。沙門たちはまた、流転の生を超えることを苦の消滅である涅槃とよびました。生死を出離すると漢訳されてきま

した。言い換えれば、流転の生を超えて新たな生の意味を生きることを現わす言葉です。空しく流転を繰り返す生とは、空しく流転を続けて、自分がなしてきたことを本当に満足できずに、同じ苦を繰り返していくということです。それに対して、自分が嘗んだことがそのまま実りをもつような生を、実りゆく生ということができます。空しく流転する生に対して、実りのある生、実りゆく生を、本当はこういう生をこそ、私たちは生きていきたいのです。そうならないことが苦しみなのです。ですから、沙門たちの求道とは、流転の生を超えて実りゆく生を求めることです。それは、流転生死に対して、出離生死を求めることです。

三つの僥逸

老病死という問題を考える時に大事な視点があります。釈尊が出家する前に、老病死についての省察を伝えている教説があります。釈尊は、釈迦族の長の息子として裕福で優雅な生活を送っていました。生活環境から言って何の問題もなかった。そういう生活の中でこんなことを省察した、

と説いているものです。教えを聞いたことのない人は、自ら老いていき老いを免れるものではないのに、自分のことを忘れて、老いた他人を見れば、困惑し恥じ嫌悪する心をおこす。それは私自身もそうであって、老いを免れていないのに、老いた他人を見れば、困惑し恥じ嫌悪するであろう。これは私にはふさわしいことではないと。このように自らを省察した時に、青春に対する青春の僥逸がことごとく消え失せた、と説くものです。

また、人は病んだ他人を見ては困惑し恥じ嫌悪する。私もそうである。これは私にはふさわしいことではないと。このように自らを省察した時に、健康に対する健康の僥逸がことごとく消え失せた。さらに、人は死んだ他人を見ては困惑し恥じ嫌悪する。私もそうである。これは私にはふさわしいことではないと。このように自らを省察した時に、生に対する生の僥逸がことごとく消え失せた。こういうことを説いている短な教説があります。阿含経の中の一つです。

この教説は、何をいつているのでしょうか。僥逸という言葉の、僥は高いこと、昂ぶることを表します。心が昂ぶっていること、高みにあるということです。逸はゆるすと

いうことです。例えば放逸^{ほういつ}という言葉がありますが、こころをゆるしつばなしという意味です。自分の思いと思うことをほしいままにして、ゆるすことを、放逸といえます。僣逸とは、心のおごり昂ぶりのことです。このような、心のおごり昂ぶりにには気がつきません。

老い病み死んでいく人を見て、困惑し恥じ嫌悪する心が生じて、そんな心が生じている自分に気づいて、同じ老病死のなかにある私にそんな心が生ずるのはふさわしいことではないと思ったのです。そう省みた時に、私はまだ若い、私はまだ健康である、私はまだ生きているという思いの中であって、その思いの中から他人の老病死を見ていることに気づいたのでしょうか。それが、心の高みという僣逸なのです。自分がどういふ思いにもとづいて他人を見ているのかを知って、その自分が頼りにしていた思い、僣逸がことごとく消え失せたというのです。

老いぼれた人を見て、私はまだ若くてよかったと思います。病いの人を見て、可哀そうに思いつつも、私はまだ健康であってよかったと思います。死んでいった人を見て、私はまだ生きていてよかったと思います。他者

の不幸を哀れむその心で自分の幸せを喜ぶ、そういう心が、僣逸と説かれているのです。

私たちの心は、ご縁の中で実に種々さまざまな心が生じてきます。そのいろいろな心が生じてきてもそれをそのままにゆるしておけば、貪り^{むさぼ}つばなし、怒り^{おこ}つばなしということになります。これを放逸と言います。しかしまた、こういう心はすべて、関係の中で生ずるものです。その関係のことを縁あるいは因縁^{いんねん}といえます。先に見たように、その縁によって生じた心を、受けとめなおすことができます。貪りの心や、怒りの心、あるいは慢心^{まんしん}で昂ぶっている心や喜んで^{こらいてい}いる心が生じますが、その昂ぶりや喜びをよしとして肯定しない思いで受けとめることもできます。それを自分自身の心に対して自ら一つの態度をとること、関係することだと言うことができるでしょう。

そういう心に対して、私たちはもう一度関係すること、態度をとることができるのです。そこに一つの自由があります。ご縁のままに一つの関係だけしかないのであれば、運命であるとしか言えなくなってしまうです。そうではなく、その関係に関係することができます。そうい

うところに、仏教のいう内面性が開かれていくことになります。どれだけ豊かな内面性をもっているかということが、とても大事な問題であります。そして、これまで傍観ぼうかんしていたことが、自分のこととして受けとめられていくことにもなっていくのです。

老病死が問題になる心

老病死を見るといふとき、自分の中に生じている心に対してもう一度自分の態度をとる、困惑の心が生じている自分に、それはふさわしくないと決定したときのことです。それまでは、あの人は可哀そうだと思うけれども、その場を過ぎ去っていく自分であった。それは、他者を見て、わたしはだいじょうぶだと、他者を捨てて、自らを頼むものであるわけです。それはふさわしくないと決定したとき、自らを頼むものであるという僥逸の心が消え失せたといっているのです。その僥逸のところが消えてはじめて自他が、自分も他者もともに老病死の苦しみの中にあるのだと、もう一度自他を捉え直すことができるような関係が開かれる。老病死を見るといっても、

毎日多くの老病死を見ていてもみな通り過ぎていた。いまはじめて老人が老人として現れたのだと。そういうこととして、この物語を受けとめ直すことができます。今まで見ていても、見なくてもいいかのようにふるまってきた青年ゴータマに、はじめて老いた他者が現れた。まさに老いが自分の問題になったといっているのです。そこに老人がいることを知らないわけではない。知ってはいるが自分のことではないのです。どうしても自分を守ろうとし、自分を良しとして立てていく。どんなに老病死を見ても自分の問題にならない。それは自分を頼む心で見るとそうなるのです。困惑などの心が生じて、それはふさわしくないと思った、そのときに僥逸の心が消え失せたといっています。その時にはじめて、老いた他者も老いていく自分も、同じ悲しみの中にあって、その悲しみに包まれてしまうのです。そこではじめて自分の問題となる。自分の問題が生まれてくる出発点が、そういうところにあると思われます。これが、老病死を見るといふことに含まれている問題なのでしょう。

(完)

事務所受付について

●事務所受付時間

平日 日 九時～十七時

土・日・祝日 九時～十六時三十分

*法務等で事務所が留守になっている時間があります。ご用事がある場合には事前にご連絡いただき事務所が開いているかご確認の上ご来院お願いします。

●墓地参拝時間についてお知らせ

平日・土 十八時頃

閉門

日・祝日 十六時三十分頃

閉門

八月十三日～十六日

十六時三十分頃

閉門

◎二〇二六年十一月まで本堂改修工事を行っているため、車でお参りに来られた時に境内地の駐車利用が出来なくなっております。ご不便お掛けしますが周辺のパーキング等のご利用をお願い致します。

敬 弔

ご生前のご遺徳を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

記

●法名 釋志願

俗名 北上武志

九〇歳

●法名 釋尼常稱

俗名 片山泰子

七十七歳

●法名 釋清昇

俗名 奥村昇三

九十四歳

●法名 釋尼恭敬

俗名 中尾 豊子

九十五歳

●法名 釋至幸

俗名 入江 幸男

九十六歳

編集後記

茨木別院の改修工事は順調に進んでいるようです。先日、本堂屋根に施される木工彫刻が完成し、その見事な出来栄えを拝見することができました。

また、YouTube番組「スタジオパースル」では、金剛組の若手宮大工の仕事が特集されています。番組内では茨木別院改修工事の様子も紹介されていますので、ご興味のある方はぜひ一度ご覧いただければと思います。

竹内 明人



株式会社 花 廣

— 生花・供花・けいこ花 —

茨木市大手町二二一八

☎(〇七二)六二二二四〇二